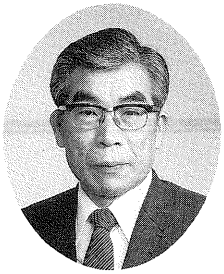

巻頭言

除草剤情報の流れ

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事
東海支部長 片岡一男

昨年6月，偶々除草剤を手撒きしている農家に出くわした。「何を撒いていますか？」「何か知らないんですが，農協でこれがよいと言われたんで……」この問答にしばし苦笑。

次に，大規模受託の法人組織で，除草剤を聞く。百筆を越す水田毎に夫々除草剤が書き込まれ，その体系は10類型を越す。そして，毎年新除草剤の展示圃をもち，農協・普及センターと検討会を実施して，翌年の剤決定の参考にしている。

前者と後者は，除草剤の使用場面における剤選定の両極端と考えられる。その間に如何なる選定方策があり，如何なる割合で分布しているかは全く詳らかではないが，興味深い。

米の生産性向上対策華やかなりし時代には，ほとんどの農村集落で，稲作の始まる前と収穫の終った後，稲作技術を中心にした座談会が行われた。更に，稲の立毛中にも現地での研修集会が屢々もたれた。これらの機会は，極めて有効な情報収集・情報交換の場であり，指導者の腕の見せ所でもあった。

除草剤についても，それぞれの稲作状況に応じた的確な情報が身近かに伝達・交換された。そして，新剤については集落内の技術レベルの高い農家の実証を経てから集落内へ普及する過程を辿ることが多かった。

稲作事情が大きく変化した今日，生産技術を中心にした集落座談会などの機会は著しく減ってきている。稲作の担い手の変化は，集落の構造変化をもたらし，技術情報の伝達経路・技術指導のあり方も大きく変化してきている。いま，こうした変化に応じた技術情報伝達の新しい仕組みが要求される時代を迎えているのではなかろうか。稲作技術 ― ことに除草剤の選択・使用に当たって，時の気象・田んぼの土壌・水・雑草や稲の生育の状況などは欠かすことのできない要件である。現場即応の技術情報を早く，的確に伝達・指導することの重要性は，今昔を問わない。

一方，除草剤の開発は驚異的な進歩を続け，毎年新剤が覚え切れないほど上市されている。ことにここ数年，田んぼに入りたくない・重い・ラフに撒いても効果のあるものなどなど，使用者の欲望を見事にクリヤーして，新しい剤 ― 1kg剤・フロアブル剤そしてジャンボ剤など ― が登場してきた。大きなヒエに効果の高い剤も。そのメニューは，質・量とも昭和時代とは比べようもなく豊富に揃ってきた。

除草剤が陽の目を見るまでに，開発はもちろん適用性試験，展示圃試験に携わる人々は，夫々の過程において，剤の特性などに関するレベルの高い議論と検討を重ねている。しかし，展示試験を経た後から農家の使用場面までには，ともすれば最大公約数的？な集約が行われて，累積された剤の情報の先細り現象或いは偏りがありはしないだろうか。

除草剤は，その特長を生かした選択・使用がされるべきであり，それが開発・試験などに従事してきた人々の願いでもある。情報化時代といわれ，インターネットのホームページに除草剤が登場する時代でもある。将来の稲作事情を見据えて，より多く，より的確な除草剤の情報が，秩序正しく流れる新しい仕組みを築きあげることは，現今の重要な課題の一つと思える昨今である。